



熊倉隊員が活動する学校では、みんなでアクセサリ作り挑戦。子どもたちの自立支援の一環でもある

熊倉隊員が活動する学校では、みんなでアクセサリ作り挑戦。子どもたちの自立支援の一環でもある

熊倉隊員が活動する学校では、みんなでアクセサリ作り挑戦。子どもたちの自立支援の一環でもある



「また来るね」。インドネシアの人たちの優しさに触れた毎日だった

※鹿兒島県青年海外協力隊を支援する会、青年海外協力隊鹿兒島県OB会、財団法人鹿兒島県国際交流協会。

の衝撃。苦勞も多かったが「日本は世界の中で生かされているんだ」と実感したんです。協力隊に参加しなければ、今の私はないかもしれません。帰国後は大阪でのサラリーマン生活を経て、地元鹿兒島に戻り貿易会社を立ち上げた。

「小学生のころから協力隊に興味があった、自分の目で活動を見てみたかったんです」。そう話すのは、南さつま市にある鳳凰高等学校の福永梨々子さん。貧しくて学校に行けない南スラウエシ州の子どもたちを支援している熊倉百合子隊員（青少年活動）に出会い、「私があこがれていた協力隊の姿でした」と目を輝かせた。そのほかにも、野菜栽培を指導する伊東和希子隊員や保健師の田淵綾隊員の活動を視察。異国の地

で奮闘する隊員たちの姿に、参加した学生たちも大いに刺激を受けたようだ。

る鹿兒島県。この事業の卒業生もこれまで2人が協力隊員となった。そのほかにも、海外留学したり、途上国で事業を立ち上げたり、医師として地元へ貢献していたり……とさまざまな分野で活躍している。弓場さんは「これからもこの事業を通じて、鹿兒島の子どもたちに世界への扉を開いていきたい。そして彼らの世界への挑戦を応援していければ」と意気込む。

保健師として、村の子どもたちに手洗いの仕方を教える田淵隊員

「ただいまー！」
夏休みの真っただ中、8月初旬の鹿兒島空港。国際線ターミナルの到着ゲートに、元気いっぱいの子どもたちが現れた。1週間前、どこか不安な表情で搭乗ゲートをくぐっていった子も今は満面の笑み。その表情を見ていると、今回のスタディツアーがどれだけ有意義であったかが分かる。

「毎年、子どもたちの目の輝きを見るのが楽しみなんです」
目を細めながらそう話すのは、弓場秋信さん。1991年から県内の3団体※が協働で実施している「鹿兒島県青少年国際協力体験事業」の発起人だ。毎年夏休みに

県内の中高生10数人をアジアに派遣し、青年海外協力隊の活動現場の視察、村でのホームステイや地元の人との交流を行うこのプログラム。過去19回、総勢202人が参加している。

地元の学校との交流会では、空手のパフォーマンスなど日本文化を披露



鹿兒島県
from KAGOSHIMA

村の人たちから出迎えを受ける一行。「こんなに歓迎してもらえるなんて想像していなくて感激しました」

また同州のビナバサ村では、4泊5日のホームステイを経験。ステイ先は、毎年弓場さんらが協力隊のネットワークを駆使して探している。「文化や住んでいる場所は違っても、身ぶり手ぶりで通じ合えた。やっぱり同じ人間なんだな」と、この年のリーダーを務めた鹿兒島県立加世田常潤高等学校の脇佳ノ介くん。「僕たちが滞在した村は貧しいかもしれない。でもみんなとても温かくて優しかったんです。その優しさの分だけ、これから発展していけばいいなと思いました」。



スタディーツアーで
世界への扉を開く



「ただいまー！」
夏休みの真っただ中、8月初旬の鹿兒島空港。国際線ターミナルの到着ゲートに、元気いっぱいの子どもたちが現れた。1週間前、どこか不安な表情で搭乗ゲートをくぐっていった子も今は満面の笑み。その表情を見ていると、今回のスタディツアーがどれだけ有意義であったかが分かる。

「毎年、子どもたちの目の輝きを見るのが楽しみなんです」
目を細めながらそう話すのは、弓場秋信さん。1991年から県内の3団体※が協働で実施している「鹿兒島県青少年国際協力体験事業」の発起人だ。毎年夏休みに

県内の中高生10数人をアジアに派遣し、青年海外協力隊の活動現場の視察、村でのホームステイや地元の人との交流を行うこのプログラム。過去19回、総勢202人が参加している。

地元の学校との交流会では、空手のパフォーマンスなど日本文化を披露